

国語慣用句大辞典

白石大二編

東京堂出版

国語慣用句大辞典

白石大二編

東京堂出版

編者略歴

明治四十五年愛媛県今治市に生まれる。昭和一〇年東京大学文学部国文学科卒業。早稲田大学教授。

編著書『徒然草と兼好』（ぎょうせい）『読み手のことを考える書き手のための文法』（早稲田大学出版部）『日本文法論』（法政大学通信教育部）『飲食事辞典』（柴田書店）『日本語の発想』『日本語発想辞典』『国語慣用句辞典』（以上、東京堂出版）など、その他多数。

国語慣用句大辞典

昭和五二年六月二〇日 初版印刷
昭和五二年六月三〇日 初版発行

著 者 白 石 大 二

発行者 岩 出 貞 夫

印刷所 有限会社秀和協進社

製本所 渡辺製本株式会社

発 行 所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三十五(〒100)
電話 東京三一一八三六 振替 東京三三〇

序

『国語慣用句辞典』『日本語発想辞典』を受けて、この辞典を出すことになった。目的は、著者の成句・慣用語の研究に一期を画し、先人の研究成果を回顧して将来の展望を志すにある。

思えば、長い道程であった。昭和十七年慣用句論の一文を草し、昭和二十五年『日本語のイデオム』をまとめ、それを発展させて、昭和三十六年『日本語の発想』とし、ついで、その後の成果を、上述の二書とした。

旧制の中学校五年間に、英語の前田雄三郎・大野武之助の両先生から語学・文法への目を開かれ、旧制高等学校の三年間の生活の一半は、語学の辞書引きであった。英語語源論の授業を受けた村田祐治先生が、くしくも、

Idiomology の創設者斎藤秀三郎氏を東都の学界に出されたかたであったことも、不思議な縁であった。ドイツ

語を習った、法学者でキリスト者であった、三谷隆正先生からは、語学は辞書を引くことと教えられた。

それにしても、大学で受講し、卒業後、辞書編集の基礎作業で親しく指導を賜った橋本進吉先生が、今改めて著作集に接すると、実に深く語構成をつまびらかにする語源学者であった。先生から、これらの本の中核をなす格論を体得したのである。

先生がたから与えられた絶大な恩恵に対して、この本がせめてのお返しとなることを願うこと切である。

終わりに当たって、五味智英・乾亮一の両氏にも、感謝の意を表したい。五味氏は、大学卒業後ずっと東京で学究生活を続けることができるきっかけを作ってくださった。氏の紹介で西尾実先生のお手伝いをするようになった。恩師の元愛媛県立今治中学校長、東京府立第三中学校長秋山四磨先生の下で働くことができるようになったのである。英語学者乾氏からは、大学以来、いろいろ語学上の知見を授かった。慣用句に絶えず目を向けるようになったのは、一つは氏との交友による。

昭和五十二年四月二十七日

白石大二

凡 例

一 この本のしくみは、第一部（慣用句大辞典、本文）・解説（慣用句の構造・特性、研究史など）・第二部（総索引、語・成句索引）から成る。

二（一）第一部本文は、五十音順に配列し、各項とも見出し（見出し語・意味（定義・説明）・用例（出典））から成る。

（二）①見出しは、原則として、複合語・成句の形で掲げる。単独語で掲げるものは、慣用句的のもの、指示語、擬声語・擬態語の類とする。

②見出しは、この本の趣旨からいって、現代に生きている慣用語句の言い方をもとにして掲げる。たとえば、原則として助詞「が」「を」を明示した形で示す。ただし、古語の言い方のままで固定したものなどは、その形による。打ち消しの助動詞「ぬ」「ん」などは、現代語の「ない」に改めたり統一したりしない。

（三）③意味は、まず語・成句の構成に即して、その語性に合うように、現代語として不自然でない言い換えをし、ついで、他の条件が付け加わった意味のものを言い換える形で示し、必要に応じて、その語・成句のさす事柄の説明を加える。このとき、同じ類型のものは、この本に掲げた語・成句を通じ、一貫して同じように説明する。これは、やが

て、その類の語源的探求に役立つものである。このことについては、解説に述べる。

②意味の類別は、単に語・成句の構成によるだけでなく、慣用句の性質上、その全体としての使い方にもよる。たとえば、「骨を折る」でも、ことばどおりの使い方の時と、それに付加された意味の時とを区別する。ことばどおりの時でも、何の骨かで違ってくる。付加された意味の時でも、使い方によって意味合いが違ってくる。従って、細かく分類することがある。原則として、①②③により、それをまとめるものとして④⑤により、更に細かく分けるときに、⑦⑧⑨による。①②③を立てる必要のないときには直ちに⑦⑧⑨による。

（四）①用例は、原則として、引用書の時代順に掲げる。

②個々の用例は、例文・引用書名作者（著者）名から成る。例文には、適宜、異文、同種の文、注釈を示す。

③個々の用例は、へんの中にし、その中に、例文・引用書名作者（著者）名を示す。引用書名・作者（著者）名は、（ ）の中に示し、上に引用書名、下に作者（著者）名を示し、・によってくぎる。引用書には、適宜、小字で章編段などを付記する。章編段などを示すのは、その引

用文の背景を明らかにし理解を助けるためである。

万葉集などでは、巻名・歌番号を示す。和歌・俳句などについては、作者名は、例文の前後に示して、()の中に示す方式によらない時がある。

俳句などで、いくつもの出典のあるものは、適宜、その一つを注記する。

④異文、同種の文は(^)の中に示し、注釈は(^)の中に示す。異文とは、たとえば、平家物語・源平盛衰記などは諸本による本文の異同を示し、同種の文とは今昔物語集・宇治拾遺物語などは同じ説話の本文の異同を対比して示して、参考に資する。注釈は、異説のあるもの、新説などを適宜示す。

⑤個々の用例、又用例の末尾に、必要に応じて、○を冠して、適当に、関連する語・成句の用例などを注記する。

⑥作者(著者)名には、日本古典全書・日本古典文学大系・日本古典文学全集・各文庫類で示すものがある。異文などを示す時にも、適宜、この方法による。

⑦用例の表記は、古典については、原則として引用書により、送りがなを欠くものなども、最少限活用語尾を送る

にとどめる。ただし、踊り字は使わないことにする。漢字の読みは、現行の音訓の使用を考え合わせて、できるだけ多く付する。かなは、和蘭字彙などを別として、原則としてひらがなによる。

明治以後のものについては、送りがな・踊り字に至るまで、原文のままとする。ただし、岡谷繁実著『名将言行録』の類は、明治以前のものに準ずる。

なお、漢字の字体は、現行の漢字による。

二つ以上の段落にまたがる用例については、前後の段落の間を一字あける。和歌を含むものなどについても、この方法による。

⑤見出し語で、『国語慣用語辞典』と重なるものには、右肩に*の符号、『日本語発想辞典』と重なるものには、同じく右肩に※の符号を付した。なお、意味の部分にも適当に*※の符号を付し、参照の便に資した。

三 第二部総索引は、本文の見出し語、見出し語の中の各構成語(原則として、付属語については、特殊なものに限る)を中心に五十音順に並べ、複合語・成句の類は同種のものを一括して掲げる。

目次

序	前付一〇二
凡例	前付三〇四
国語慣用句大辞典	三〇五
解説	五七〇五九三
語成句索引	五五〇六四

国語慣用句大辞典

あ

あ とつさに口を大きく開いて発する声。

「ヤイヤイヤ。狼狽者。肌は経れても経れいでも。我が子に不義を仕かけた畜生。侍の身で高安殿が。助けて置かしやろ様なければ。何の今迄存命へて。うかうか爰へ何しにこう。ア隠すより顕るるはなし。親はないと云はしても。有る事知つて。娘が手から度々の合力金。二人が命を養うたは。皆高安殿の御厚恩。(摂州合邦辻合邦内の段・菅専助)」

あ (ああ・あつ) 感ずる声。感嘆する声。

意外だと思ふ声。へさて説法をはりて、尼公其の辺の聴衆まで皆よびあつめて、大なる桶に酒を入れて取り出してすむ。能説房一座せめて、さかづきとりあげてのみけり。此の尼公あさましく候ひける事かな。酒に水いるるは罪にて候ひけるを、知り候はざりけるよといふに、水のすこし入れたるだによし。今日いかにめでたくあらんと思ふ程に、能説房一度のみて、あ、といひければ、いかによかるらん。感ずる声かと

あ——ああ

聞くほどに、日来はちと水くさきけにてこ候ひつるに、これはちと酒くさき水にて候はいかに、と云ひければ、さも候らん。酒に水入るるは罪ぞ、と仰せられ候ひつる時に、是は水に酒を入れて候とて、大桶に水を入れて、酒を一罇ばかり入れたりける。此の尼公興懷にしたりけるにや。又悪しく心得たりけるにや。(貞享三年坂沙石集六、六能説房説法之事・岩波文庫) (能説坊、「ああ」と云ひければ、「いかによかるらむ。感ずる音か」と、聞くほどに、(梵縁本沙石集六、一六・日本古典文学大系) (能説房、あつと云ひければ、如何によかるらんと感ずる音かと聞くほどに、(校訂広本沙石集六、一一))

ああ 感動して発する声。反応を示す声。反省して発する声。(法皇あつばに入らせおはしまして、「物どもも参つて狼狽つかまつれ。」と仰せければ、平判官康頼参りて、「ああ余りにへいじの多う候に、もて酔うて候。」と申す。(平家物語)、鹿角) (ああ降つたる雪かな、いかに世にある人の面白う候らん、略けふの寒さをいかにせん、あら面白からずの雪の日やな。(鉢の木・謡曲集) (能親も。心の底は子を思ふ歎きを。見せじとかぶり振り。「アアイヤイヤ我が子でも悪人を不便と思ふは天道へ敵

対。(略)」と。摺り赤めたる恩愛の。涙かくせと悲しさは。声の曇りに顯はれし。(摂州合邦辻合邦内の段・菅専助) (「ア、…」と合邦は強いて強気な口調。(日本古典文学大系脚注) (へしたがまんざら慰な他人の死んだやうにも思はぬ故。思はず涙が。ムムハハハハ。アアイヤイヤ涙は出ねど。コリヤコレ年の科。ガ此の目がかすんでかすんで(同) (「ア、…」と一旦は涙を拭うが、「かすんで…」と再び愁い。(同) (母親は。「アレアレ聞いてか合邦殿。云ひ訳が有るといひ。ママママア聞いてやつて下さんせ。ハテ娘と思へば義理もかける。ガ幽霊を内へ入れるに。誰に遠慮も有るまいぞえ。」「ムムアアいか様のう。此の世を放れた者なれば。世間を憚る事もないかい。そんなら早う呼びこんで。茶漬でも手向けてやりや。アア可愛や立ち寄る所はなし。幽霊も無ひだるから」と。身を背けるは泣く百倍。(同) (「ムウ」と考え込んだ後、「ム」と息で軽くうなずき、女房の言葉にはつとして「ア、…」。(同) (ハガ又高安殿が今日まで。うぬを助けて置かつしやる御心底を推量するに。元儕は先奥方の婢。後の奥方に引つ上うと有つた時。達つていたい仕をつたを。心の正直懇望でむりやりに奥方なり。アア手をか

三

けず奥様共云はさずば。今此の時儀にも及ぶまい。殺さにやならぬ様になつたも。皆我が業とお身の上を返り見て。親への義理に助けさつしやるを。アア有りがたい。恥かしいと思ふ心がけし程でも有るなら。譬へどれ程惚れてをつても。思ひ切るに切れぬと云う事はないわい。(同)「ア、手を」と顔をそむけて、通俊の反省を推量する体。(同)「俊徳丸「略」と。宜ふ声を聞き取る門口。「アアイヤイヤ。下郎めは先刻より。始終の様子承る。此の所にござ有ること里人の噂に聞けば。若し敵方へ洩れては大事。一刻も早くお供せん」と。気をせく折しもかけ出る玉手。(同)「ア、…」は奴詞(略)。(同)「へどうだ。世間は落着いたらう。エ、先月二十七日サ。松方の所に行つて、高島も西郷も来てネ、ひどく言つてやつたよ。樺山は居なかつた。ア、歌がやつたらあヌ。(海舟語録明治二九・一〇・一七)「ア、さうかい、さうだらう、田中は知らないのだネ。何か、もち上りさうかエ。どうせ、血を見ずには、止むまいよ。一つ騒ぐ方がいいのサ。(略)星は何処のものだエ……ア、さうかエ……さうだらうな。アレだけ悪まれるのだから。(同明治三二・一・二)「あゝ唯恥かしきは世人の万人よりは君一人の見

る眼也。高山こそは小事の得喪によりてかくも迷ひ惑へるよと想はれむことの口惜しさよ。願ひ思ふ所詮はたゞ／＼笑て是の一局面の通過を眺められよ。(樗牛全集五想華及消息、明治三四・一一・一五鎌倉よりライプチヒなる姉崎へ)「ああ汚らわしい」

あ(応答) いやいや承知する声。不承不承な返事。(主(略)すなはち汝に言ひつくる程に討つて来い。太郎冠者あ。主ああとは不返事だが、後日に討ち洩らしたなどといふ事を聞いたらば、汝までをただは置くまいぞ。太郎冠者ああ討つて参りませう。(武悪・日本古典全書)「まいやいや。この間中より見合はすれど、今日が一晴れ間ぢや程に早う行け。シテあ。主ああとは不返事だが、おのれ行くまいといふ事か。シテいやさやうではござりませぬ。主ていと行くまいか。シテああ参りませう参りませう。(木六駄・日本古典全書)

あ(自問自答) 思い出した時に軽く発する声。△さあ、よく覚えてませんな。ああ、軽井沢に一つ別荘を買ったかもしれせん。しかしこれもですよッ、むこうからお引き取り下さいと言われて買ったんであつて……。(サンケイ抄)

ああ思うに ああと感動して考えるのに。△啖かに委る、斃にし人還りて彼の怨を報

ゆることを。嗚呼惟ふに、怨報朽ちず。……(日本靈異記下、生物の命を殺して怨を結び、狐、狗と作りて互に相報する縁第二)

ああしまった ああ、失敗した。失敗などに思い当たって驚く様子。

ああしやしやし あざ笑うはやしことば。(宇陀の 高城に 鳴鶴張る 我が待つや 鳴は障らず いすくはし 鷹ら障る 前妻が 菜乞はさば 立狐の実の 無けくを こきしひあね 後妻が 菜乞はさば 枡実の大けくを こきだひあね。 ええ、しやしやし。こはいごのふぞ。ああ、しやしやし。こは嘲咲ふぞ。(阿々音引志夜胡志夜。此者嘲咲者也。)(古書記中)「(宇陀能多加紀爾(略)エエシヤコシヤ此の辭ここに脱す、下に出づるは解也、宇波那理賀(略)アアシヤコシヤ此の辭脱する事上の文と同じ、エエシヤコシヤ、アアシヤコシヤ、此の二句は、本末語ひ終ることに嘲り云ふ辭也、下に音声を書けず、書記には来目歌終りて、又嘲り言あり、阿々(略)エエ、云云、アア云云は上の歌の本末の下に有るを、此所に其の音声を解釈する也、エエ、アアは共に歎息の辭にて音を引く、シヤコシヤはをかしやをかしやと嘲笑曾と本文の註也、(略)(古事記語歌註・内山真龍)

ああしやしをあざ笑うはやしことば。(虞、復唯類者無し。皇軍大きに悦びて、天を仰

ぎて咲ふ。因りて歌して曰はく、今はよ
今はよ ああしやを(阿々時夜場) 今だ

にも 吾子よ 今だにも 吾子よ 今来目
部が歌ひて後に大きに晒ふは、是其の縁
なり。(日本書紀三、神武)(阿々時夜場

○私記に阿々者咲声也、時多「夜」場者猶
言乎加之といへるは当れり、新撰字鏡に
可笑を阿奈遠加之とあり、阿奈と阿々は同
韻にて同語なり、遠加を約むれば和の一言
となる、その和は上の阿々の余韻に含めれ
ば省けり、下の塙は与に通ふ乎にてあなを
かしよといふ言とこそ聞ゆれ、古事記に阿
々志夜、胡志夜とあるもあなをかしや、是
はをかしやといふを省き約めしにやあら
ん、(日本紀歌解規乃落葉・荒木田久老)〓

ああ付けたよ ああ(と口を大きく開いて)
うまく付けた(とはめる)。

ああとかたぶく「ああああ」と反応して、
首をかしげる。へいとものはれに眺めて
おはするに、御方参り給ひて日中の御加持
にこなたかなたより参りつどひ、もの騒が
しくのしるに、お前にこと人も候はず、
尼君所えていと近く候ひ給ふ。「あな見苦
しや。短き御几帳引き寄せてこそ候ひ給は
め。風など騒がしくて、おのづからほころ
びの隙もあらむに。医師などやうの様し
て。いと盛り過ぎ給へりや」などなまかた

はらいたく思ひ給へり。由めきそして振舞
ふ、とは寛ゆめれども、もうもうに「老々
に」耳もおぼおぼしかりければ、「ああ」
とかたぶきてゐたり。さるはいとさ言ふば
かりにもあらずかし。六十五六の程なり。
(源氏物語若葉上)

ああと笑う 感情をこめてああと笑う。

ああ春々 ああ、春よ春よ。ああ、春だ春だ。
春に対する呼び掛けや詠嘆。へ於春春大な
る哉春と云々(松尾芭蕉向之風)〓

ああほしい ああ、手に入れた。願望を表
す。(ああほしいなあ百両に人たかり(柳
多留二〇、三一)〓

ああ喜ばしきかな ああ、喜ぶべきだ。ああ
と喜びの感動の声を発し、快く満足する気
持ちを表す。へ吾先に斯の像を失ひて、日
に夜に恋ひ奉る。今邂逅に遇ふ。嗟呼慶
しきかな(日本霊異記上、口知識、四恩の為に
絵の仏像を作り、驗有りて、奇しき表を示す縁
第三十五)へ賛に曰はく、嗟呼慶しきかな、
三間名の干岐の氏の大徳、内に聖心を密に
し、外に凡形を現し、俗に著き色に触れ
て、戒珠を染めず。没するに臨み西に向か
ひて、神を走せ異を示す。誠に知る、是聖
にして凡に非ざることを。(同下、沙門、功
を積みて仏像を作り、命終はる時に臨みて、異
しき表を示す縁第三十)〓

ああら 感動して発する声。驚きあきれて発
する声。あらあら。(玉手はすつくと立ち

上がり、「略」と。飛びかかつて俊徳の
御手を取つて引立つる。「アムラ穢らは
し」とふり切るを。はなれじやらじと追ひ
廻し。ささへる姫を踏み退け蹴退け。へ撰
州合邦辻合邦内の段菅専助へああらめづ
らしやハこはい土左衛もん(柳多留一四、
二二)へああらおもしろからずの雪の供
(同二〇、二二)〓

ああん口をあく ああん口を大きく開
く。(へ略)あるじ鉄にてのべたる、ちやし

やくのやうなるものを持ち出し、「ドレド
レズとこちらへよつてくちをあかんせ。北
「ハイハイアアン(ト、くちをあく) ある
じ「ハテえらう大きなくちや。そしてい
こ不掃除なこつちやの。歯くそだらけち
や。これちやをなごなぞはいやがるぢやあ
ろ。(統東海道膝栗毛初下・十返舎一九)〓

ああん口をあける ①ああん口を大きく
あける。必要があつて大きく口をあける。
②びっくりしたり、失望しがっくりした
りして、口を大きくあける。

あい 応答の声。「はい」「えい」「ない」「へ
い」などが相手の深く敬う応答の声である
のに対して、敬意の点でそれに次いだ応答
の声。鼻にかけていうときは、うちとけた

言い方となった。あとに、「ああ」「をを」

「うう」が続いた。ヘエエ訳もない事云はしやんすな。わしや尼に成る事いやぢやいやぢや。アイいやでござんす。(摂州合邦辻

合邦内の段・菅専助) △ライヤイライヤイ

ライヤイライヤイ。スリヤそちが生れ月日

が妙薬に合うた故。一旦は癩病にしてお命

助け。又身を捨てて本腹ささうと。それで

毒酒を進ぜたな。「アイナア」(同) △松

魚 御国家の侍、大小いかめしく居酒屋に

かかり、「なんと、酒のよろしいがあるか」

「ハイ、ござります」 「一盃熱燗にして出し

やれ」 「ハイ唯今。マッお上りなされませ」

折ふし、初松魚辰已上りに走り違ふ。「コ

レコレ松魚、直段は何ほどぢや」 「アイ、お

前もこの松魚を買ふ気かえ」 「コレコレ何

をいふ。我らどもだとて、松魚を食ふなど

いふお触れもない。何ほどぢや」 「アイ、

こつちの一本は、ちとつぎなやうだ。エエ

一貫よこしねえ」 「ラットヨシ。一文も侍

が値切りはせぬ」 松魚売「おめえは見上げ

た。刺身にしやせうか」 「イヤイヤ、一貫

のつもりにして、八文がくりやれ」 (民和

新繁・九尺庵蘭陵山人) △コレ、そばや

さん。薬を飲むから、御無心ながら、湯を

ちつと、くんなさい」 そばや「アイ」と、

湯を汲んで出せば、(臍繰金空腹・十返舎一

九)

相愛する 互いに愛する。△凡そ相愛する二

ツの心は、一体分身で孤立する者でもな

く、又仕ようとて出来るものでもない故

に、(浮雲第八回・二葉亭四迷)

合縁奇縁 合縁と奇縁。合縁も奇縁による。

互によく和合する縁も不思議な因縁によ

る。夫婦や友だちどうしのうまくいくのも

いかないの、不思議な因縁によるたと

え。

あいきようがある ①魅力がある。かわい

い。人を引き付ける。人好きがよい。人好

きがする。②にこにこしている。やさし

い。ていねいで愛がこもっている。愛想が

いい。△波動は、ひとりびとりの人間のた

たずまいからおこってくる。たとえば末造

だが、かれは、きれいすぎで、おしきれで

あり、いつも身の廻りをりっぱにするのが

道楽だ。外目には、頼もしげで、気がきい

ており、優しい様子で愛敬もある。……

(雁解説・稻垣達郎)

あいきようがこぼれる かわいらしさ、人好

きのよさが流れ出る。△この頃ばかり、御

暇のひまひまに、この僻事も直させ給ひて

んや」と聞え給へば、「人の師なんどすば

かりにて、直さるばかりの僻事にては侍

らじものを」とて、うち笑ひ給へる、△愛

敬こぼる」とは、これを言ふにや」と、見

え給へるを、(狭衣物語三) △……など、

書きすざびて見せたてまつれば、「味気な

き賢しらかな」と、笑ひ給ひて、「色どる

風は」と、ロずさみ給へる、なほ、愛敬こ

ぼるばかりなり。」(同)

あいきようがない ①人好きが悪い。人好き

がしない。②やさしくない。ていねいでな

い。愛想が悪い。

あいぎようづく あいきようがある。あいき

ようがあふれる。人づきがよい。人好きが

する。△六の宮、(略) かはらけとりて左の

おとどに参り給ふを見れば、いと小さく

ひちちかに、ふくらかに愛敬づき給へり。

(宇津保物語九、蔵びらき上) △顔のきよげ

に愛敬づきうらうらしき事、殿上童ともい

ひつべし。(同一六、楼の上の下) △少将、

いかがあると、ゆかしうて、几帳のはころ

びより、臥しながら見給へば、白き綾、搔

練など、よからねど、かさね着て、面ひら

らかにて、北の方と見えたり。口つき、あ

いぎやうづきて、少しにはひたる氣つきた

り。清げなりけり。ただ眉の程にぞ、およ

ずけ、あしげさも少しであたりと見る。

(落窪物語一、北の方、女君の鏡箱を求める)

△今一人は、東向きにて、残る所なく見ゆ。

白き羅の單襲、二藍の小桂だつもの、な

白き羅の單襲、二藍の小桂だつもの、な

白き羅の單襲、二藍の小桂だつもの、な

いがしろに著^きなして、紅の腰引き結へる際^{きは}まで、胸あらはに、凡俗^{はんぞく}なるもてなしなり。いと白うをかしげに、つぶつぶと肥えて、そぞろなる人の、頭^{はう}つき、額つき物あざやかに、まみ、口つきいと愛敬^{あいけい}つき、はなやかなるかたちなり。髪はいとふさやかにて、長くはあらねど、下端^{かみもと}、肩の程いと清げに、すべていと捌^{はた}けたる所なく、をかしげなる人と見えたり。むべこそ親の世に

犬。〈愛犬の耳斬りてみぬ あはれこれも物に倦^うみたる心にかあらむ 二握の砂・石川啄木〉

合^あいことば ①合うことば。合わせることば。戦争・夜討ちや、物取り・押し入り強盗や、けんかなどで、前もって打ち合わせしておく合図のことば。②広く、お互いの中だけのことば。仲間うち隠語。

なくは思ふらめと、をかしく見給ふ。心地ぞなほ静かなる気を添へばやと、ふと見ゆる。かどなきにはあるまじ。(源氏物語空蟬)へ幼くより、いづれの御方にも隔てなく、殿の、ならはし給へれば、女房なども、見えたてまつらぬはなき中にも、この御方には、みづからも、わららかに愛敬つき給へる御心ざまにて、わざと、隔て給ふ事もなかりけり。紅のきぬ、あまたが上、桜の固文なる着給へるかたち、はなばなと清げに、「盛りは、ましていかばかり見るかひあるべき御さまなりけん」とぞ見え給へる。(狭衣物語三)

あいさつもそこそこにあいさつも、急いで、じゅうぶんでなく。急いで、あいさつもじゅうぶんにしないで。〈皆々おくり出て、挨拶そこそこにひきわかれ、(東海道中膝栗毛二下・十返舎一九)〉

九、雷の子・後素軒蘭庭)
 あ^{*}いそ(愛想)がいい ①にこにこして、人当たりがいい。②ていねいで情のこもった言い方をする。口先がうまい。③人あしらいいい。客の扱い方がうまい。
 あ^{*}いそ(愛想)が尽きる 何々に好意がもてなくなる。何々がいやになる。何々に絶望する。何々を見限る。

いさつもそこそこにあいさつも、急いで、じゅうぶんでなく。急いで、あいさつもじゅうぶんにしないで。〈皆々おくり出て、挨拶そこそこにひきわかれ、(東海道中膝栗毛二下・十返舎一九)〉

(こどもを)愛する こどもなどをかわいが

あ^{*}いそ(愛想)が悪い ①冷たい顔などをして人当たりが悪い。②ていねいな情のこもった言い方ができない。物の言い方がまずい。③人のあしらいがへたである。客の扱い方がまずい。

る。〈ここに物好きな全盛の太夫、人のこはがる雷の鳴り渡るを悦び、日ごろ雷の子がほしいと愛がしてみたいと望みしに、ある日、随分ふかまの客、揚屋で太夫と一座して、「これ太夫す。おれは此の間、北国へ年礼に行て、珍なものをもらうてきた。そなたの欲しがる雷の子を、いま一つあらば、目貫にもしてみたいくらゐ。紙入に入れて来た」それは、ヲヲうれし。早う見せておくれいなア「うつかり持ちやんな。逃げるぞ」「ヲヲかはいらしい」と、手の内にてしばらくあいし見る内に、太夫のふところへ、フト飛び込む。(立春断大集三

こどもを)愛する こどもなどをかわいが

あ^{*}いそもこそも尽き果てる すっかり愛想が尽きる。全くいやになってしまふ。「こそ」は、語呂で重ねて口調を合わせたもの。
あ^{*}いそを尽かす 好意が持てなくなる。いやになる。絶望する。見限る。

あ^{*}いきょうを振りまく だれにでもあいきょうを注ぎかける。だれにでもどんなあいきょうを分け与える。すべての人にえがおで接する。

あ^{*}いそ(愛想)が悪い ①冷たい顔などをして人当たりが悪い。②ていねいな情のこもった言い方ができない。物の言い方がまずい。③人のあしらいがへたである。客の扱い方がまずい。

あ^{*}いそ(愛想)が悪い ①冷たい顔などをして人当たりが悪い。②ていねいな情のこもった言い方ができない。物の言い方がまずい。③人のあしらいがへたである。客の扱い方がまずい。

愛犬 愛する犬。かわいがっている犬。飼

あ^{*}いそ(愛想)が悪い ①冷たい顔などをして人当たりが悪い。②ていねいな情のこもった言い方ができない。物の言い方がまずい。③人のあしらいがへたである。客の扱い方がまずい。

あ^{*}いそ(愛想)が悪い ①冷たい顔などをして人当たりが悪い。②ていねいな情のこもった言い方ができない。物の言い方がまずい。③人のあしらいがへたである。客の扱い方がまずい。

も、この苗売も医者^{いしや}の格で、間に枯れねば、私どもが咽^{のど}が干ます」。(飛談語・宇津山人菖蒲房)

あいた口へもち ちようど口が開いているところへ、うまくもちが落ちて来る。あいた口へぼたもち。偶然幸運が舞い込んで来るたとえ・ことわざ。へ金兵衛おもひもよらざること、いと不審におもひけれど、これさいはひ福徳の三年目、あいた口へ餅、天へも上がるこちして、則ち驚籠に打ち乗りて、いづくをあてともなく出でゆきける。(金々先生栄花夢・恋川春町)

あいづちを打つ ①あい(間)につちを打つ。いっしょにつちを打つ。焼いた鉄を師匠が打つと、そのあとちょっと間を置くだけで、でしがつちを打ち入れて、互につちを打つ。②人の話にことばを添えてはどよくとりなす、話の調子を合わせる、調子を合せて話をおもしろくする様子・たとえ。へうぬ惚るる友に 合鍵うちてあぬ施^{ほどこ}手をするごとき心に(一握の砂・石川啄木)

*あいよりいでてあいより青し 青はあいから取ってあいより青い。でしが師匠よりもすぐれる、影響を受けた後進者がその先輩よりも進むなどのたとえ。

青い ①色が青い。青い色だ。へ影南山を浸

して青くして混濁^{くわうたう}たり。(平家物語七、火打合戦)②心配や恐怖で血の気がなくなつて青い。へ木曾は箸取り食ひけれども、中納言は青く興醒めてめさず。(源平盛衰記三三、光隆卿木曾が許に向ふ)③病氣などで顔色が悪い。④若い。未熟である。

青くなる ①青色を帯びる。②顔色などが青白くなる。顔色が悪くなる。③驚いたり恐れたりする様子・たとえ。へでん「ほんによ能い加減にだまされ居ろ友達顔がよこれらア熊」へ。尿でもぐんべえ団こつちがだましてやるのだアでん「又つき出されて青くならうと思つて(浮世床初上・式亭三馬)

青田刈り ①稲の青々とした田を刈ること。青々とした田の稲を切り取って収めること。稲のまだ実らない田を刈ること。まだ実らない田の稲を切り取って収めること。②まだ卒業していない学生生徒を雇用契約をすること。修学中の学生生徒と雇用契約を結ぶこと。へこのように大学と学生とを本来の使命や目的から外させるやうにしてしまったのは企業^{かいぎ}の責任である。青田刈りは厳に慎んでもらいたいものである。

青田を刈る ①稲の青々とした田を刈る。青青とした田の稲を切り取って収める。稲のまだ実らない田を刈る。まだ実らない田を

切り取って稲を収める。へ凡そ京中には源氏の勢満ち満ちて、在所々に入り取り多し。賀茂、八幡の御領とも言はず、青田を刈りて馬草にする。(略)木曾大いに怒つて、「我信濃を出いでし時、小見、合田の戦より始めて、北国には、砥浪山、……、西国には、福龍寺繩手、……を攻めしかども、未だ敵に後ろを見せず。縦ひ十善の帝王にたましますとも、甲を脱ぎ弓の弦を弛いて降人にはえこそ参るまじけれ。譬へば都の守護して有らん者が、馬一匹づつ飼うて乗らざるべきか。幾らもある田共刈らせ馬草にせんを、強に法皇の咎め給ふべき様やある。(略)とて打つ立ちけり。(平家物語八、鼓判官)へ木曾是を聞きて申しけるは、「平家の謀叛を起して君を君ともし奉らず、人をも損じ民をもなやまし、悪行年久しきによりて、義仲命をすてて責め落して、君の御代になし奉りたるは、希代の奉公にあらず哉、それ何の咎めあつて、只今義仲をうたるべきや、東西の国々ふさがつて都へ物ものぼらず、もて来る方もなし、餓飢して死ぬべければ、命を助からんために、兵糧米をとり、青田を刈らせて馬に飼ふ、力及ばざる事也、さればとて王城を守護してあらん者が、馬一疋宛のらせはいいかであるべき、(略)」といひけれ

ば、(長門本平家物語一五)へ木曾は勅勘を蒙る由聞きて申しけるは、「略」武士と云ふは、殊に馬を勞りて敵をも落す、馬弱くしては高名なし、されば其の食み物の料に、青田青麦を刈らんに僻事ならず、(略)として勳をして、(源平盛衰記三四、法住寺城郭合戦の事)②まだ卒業していない学生生徒と雇う契約をする。修学中の学生生徒と雇用契約を結ぶ。

青ばえ 青黒くて形の大きなはえ。うるさく付きまとうものたえ。

青ばえのあらんように 青ばえがたかればするうちに。青ばえのうるさく付きまとうように。離れないでいる様子・たえ。へこの仁寿殿のぬす人により、のたまふぞかし。不興したてまつりて籠り居りて、恋ひ悲しび待ち居て、青繩のあらむやうに立ち去りもせでおはすれば、いかに恐ろしく思さるらむ。さる人のゆかりをこそ思すらめ(宇津保物語一四、国ゆづりの下)

青びょうたん ①青いひょうたん。まだ熟さないひょうたん。②青い顔のたとえ。③や

せて顔色の青い人のたとえ。

赤い顔 ①赤味を帯びた顔。②酒を飲んだりして赤くなった顔。

赤い着る物着る 見せしめなどのための赤い着物を着る。こらしめなどのために赤い着

物を着させられる。へにくいやつのはなはさかせいで、めへはいを入れをつた。」「あかいきる物きたやうにして、かへしませう。どろばうめが。」「おのれ、大がたりめ、なぜ、だんなのめへはいを入れをつた。そいつ、しめませう。」「こゆるされませう。」「けんどんちち、ぶちころさるる。(枯木に花咲かせ親爺)

(牛を)あがさせる 牛などに足をあがさせる。牛などに地を足でかかせる。牛などを走らせる。(木曾牛飼とはえ言はで、「やれ小牛健児、やれ小牛健児。」といひければ、車をやれといふと心得て、五六町こそあがかせたれ。(平家物語八、猫間)へ蝶の羽をひろげたる如くに左右の袖をひろげ足を擡げて、「やをれやをれ。」と喚きけれども、虚聞かすして六七町こそあがかせたれ。(略)車を留めて後、木曾起き居たりけれども、六七町はあがかせぬ。(源平盛衰記三三、光隆卿木曾が許に向ふ)

あかが抜ける あかが取れてきれいになる。いなかくささやしろうとくささがなくなる。(笑はれる度に田舎の垢が抜け(柳多留八五))

あかがりが切れる 切れて赤くなる。赤くはれて切れる。あかぎれがする。寒さに冒されて手足の皮が裂けて赤くなる。ひび割れ

がする。へ入り乱れたる合戦なれば、跟を取つて頭につけ、頭を取つて跟につくる程に、生えうず事と跟に髭が生え、頭に髭が二三百ばかりはかりと切れにけり。へ茶毘座頭・日本古典全書)

あかぎれがきれる 皮膚が赤く切れる。寒さに冒されて、手足の皮が裂けて赤くなる。皮膚がひび割れがする。

あかく著く 明るいうちに着く。(三月十六日少将殿鳥羽へあかうぞ著き給ふ。(平家物語三、少将都帰)

(顔が)赤くなる 運動をしたり、酒を飲んだり、困ったり恥ずかしがったりして顔が赤くなる様子。

明かし暮らす 夜を明かし日を暮らす。夜を過ぎし日中を送る。一日を過ごす。毎日を送る。(昼は法華經を読みたてまつり、月のあきき夜は、琴を弾きつつあかしくらしたまふ。(浜松中納言物語)へこれをばかくとも知り給はず、三位中将は池大納言の様に、二心あるにこそとて、大臣も打ち解け給ふ事なければ、努々さは無き物をとて、いとどあぢきなしとて、さらば迎へ取つて、一所にて何にも成らばやとは常は思ひ立ち給ひけれども、我が身こそかく憂からめ人の為にはいとほしけれとて、明し晩し給ひけるぞ、せめての志の深さと覚えて